

# 希望

## 希望の手に

沖縄の貧困・子どものいま



大型連休に挟まれた平日の居場所。那覇市牧志にある子ども居場所「kukulu(ククル)」で、食卓を囲みながら中高生の笑い声が響く。昼飯の献立は、キョーザとチャーハンにあえ物だ。「食事の片付け係は、じゃんけんして決めよう」。1人の女子生徒が声を掛ける。負けた人が、食器洗いを始める

### 中高生の居場所 kukulu

### 第3部 ⑤

と、他の数人がサッカーゲームやビリヤードに興じる。

「kukulu」は「NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい」(金城隆一代表理事)が運営。困窮や親の病気、いじめなどさまざまな事情を背景に、学校へ通うことの難しい子どもたちの居場所として「学習支援」「生活支援」「就労支援」を手掛ける。

世帯以外の子どもたちにも門戸を開いている。32人いる利用者のうち、約10人ほどが常時利用している。寄付金や古本販売で運営費を捻出している。

### 学習、生活、就労を支援

## 中退と貧困化防ぐ

「一緒にごはんを食べよう」を合言葉に週2回開所。2013年7月から15年3月まで、那覇市の委託事業として生活保護世帯の不登校の子どもたちを対象にしていたが、委託事業が終了。昨年12月から自主事業として、保護

を含む10代後半の「居場所」は珍しい。訪問相談も手掛ける。外出が困難な子どもの自宅を金城代表理事らが訪ね、保護者の相談に乗り、子どもを来所を後押ししている。那覇市の教育委員会の不登校支援は中学生までが対象だが、kukuluでは高校中退防止にも取り組んでいる。金城代表理事は「中学校で不登校を経験している子は、高

校生になっても中退のリスクを抱えている」として、高校を卒業するまで見届ける。寄り添いが大切だと強調する。高校中退者の多さは、県内の子どもを取り巻く課題の一つ。県立学校教育課によると公立・私立を合わせた県内高校の中退退学者は14年度で1144人になる。退学率は2・2%で、全国平均の1・5%を上回る。高校中退から生

じる課題は詳しい「NPO法人さいたまユースサポートネット」代表理事の青砥恭氏は「10代で支援がないまま、高校を中退していく人は非正規雇用やアルバイトの働き方をとする人が多くなり、ほぼ貧困になっていく」と指摘。高校中退防止の必要性を説いた上で「学校と福祉部門が連携して、中学生のうちから学ぶ喜びと将来へ期待を抱けるよ

うな支援が大事」と強調した。

kukuluでは再開所以降、人間関係などに悩み高校中退の危機に遭った4人を支援した。定時制高校の午前部に通っていた16歳の男子生徒に対しては、通信制への転籍を提案した。男子生徒は支援員からレポートの書き方を教えてもらい、学業を続けていく。「今週はいつもより早めにレポート出したよ。頑張っているでしょ」と誇らしげに話した。

「学校へ行かなくちゃ」。定時制高校の夜間部に通う女子高校生がリュックサックを背負う。「行つてらっしゃーい」と他の子が手を振り見送る。居場所が仲間と過ごし、エネルギーを充実させて、外へ向かう。

金城代表理事は「今後は就労支援にも力を入れたい考えだ。カフェを併設し、接客を経験してもらえば、キャリア教育も導入したいという。子どもの声をしっかり拾って、子どもに寄り添う場であり続けたい」と意欲を見せた。(子どもの貧困取材班)